

東京外語会主催 文化講演会

『歴史的に読み解く「英国 EU 離脱」』

講師 伊東剛史 東京外国語大学総合国際学研究院
准教授

日時：10月15日（土）午後2時—4時
（続いて懇親会）

場所：東京外国語大学本郷サテライト4階



プロフィール

1998年慶応義塾大学文学部史学科卒、2005年ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ Ph.D. 取得。日本学術振興会特別研究員、金沢学院大学文学部講師を経て、2014年東京外国語大学大学院総合国際学研究院講師

に着任。2016年4月より現職。2015年7～8月マックスプランク人間発達研究所・感情史研究センター客員研究員、2015年9月～2016年9月中央ヨーロッパ大学史学科客員研究員。

主要研究業績：*London Zoo and the Victorians, 1828-1859* (Woodbridge: Boydell / Royal Historical Society, 2014)；「帝国・科学・アソシエーション----「動物学帝国」という空間」近藤和彦編『ヨーロッパ史講義』第8章（山川出版社、2015年）；「英国博物館の再編と「信託管理」の確立---- 1830～70年代のイギリスの文化政策」『史学雑誌』118/2（2009年）。共編著『痛みの文化史----イギリス史のなかの苦痛と共感（仮）』（東京外国語大学出版会）を2017年2月出版予定。

講師からのメッセージ

2014年4月に「北西ヨーロッパ」地域の担当教員として着任しました。「北西ヨーロッパ」とは主にイギリス・アイルランドのことですが、イギリス人の過半数は自分たちを「ヨーロッパ人」とは見なしていないようです。そうは言っても、やはり2016年6月23日のイギリスのEU離脱是非をめぐる国民投票の結果は、多くの人にとって驚くべきものでした。その後、イギリスはパニック状態から脱しましたが、今後の見通しは不透明なままです。

今回は、現状の混乱から少し距離をとり、イギリスと大陸ヨーロッパとの歴史的な繋がり
の視点から、「英国 EU 離脱」問題を考えてみます。「イギリス」を構成する空間的領域と
その内部の政治的構造は、時代とともに大きく変化してきました。中世の百年戦争、近世の
名誉革命のようなイギリス史の大きな転換点において、大陸ヨーロッパとの関係は重要な
意味を持ってきました。ヨーロッパ史としてのイギリス史を振り返り、その長期的変容を
見据えることで、今後を展望する視座が得られたらと思います。